
2つの世界

山城 ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの世界

【Nコード】

N6797L

【作者名】

山城 ありす

【あらすじ】

主人公は魔界のプリンセス。

お城から逃げ出した先で見つけたものとは？

(前書き)

初めての短編です。

うまく書けないかもしれませんが宜しくお願いします。

「ミルさま、今日は英語・ドイツ語・フランス語とヴァイオリン、乗馬のおけいごがございます。」

淡々とした口調でリールは話す。

「いやよ。今日のおけいごは無しにして。」

どうしてこんなにもたくさんのお勉強をしなくちゃいけないの。わたしはまだ10歳よ。
普通ならお外で楽しく遊んでる年齢じゃない。

「そうは行きません。次期後継者として教養は必要です。女王さまも心配なさっていましたよ。」

「ママがどうしても心配するのよ?」

わたしのママは、魔界で1番大きな国　妖樹国の女王様。
だから、わたしは妖樹国のプリンセスなの。

「後継は来週なのですよ。ミルさまがしっかりやっていけるか、と夜も眠れない様子で……。」

ママに出来たんだから、わたしにだって出来るはずよ。ママはしっかり者だけど、あたしだって一応その血を引いてるわけだし。

「大丈夫よ。りっぱな女王になってやるんだから。」

わたしがちゃんとやってる姿を見たら、ママだっけと見直してくれるわ。

「ミルさまがそんな風におっしゃるなんて。私、感動いたしました。

」

リールが目には涙をためて言う。

わたし、どれだけ悪く見られてるのよ……。

「それではりっぱな女王になるため、おけいこを頑張りましょう。」

でも、おけいこだけはいや。つまらないじゃない。

こつなったら逃げてやるわ。

「そうね。でも、おけいこまでまだ時間があるからお散歩でもして

こよつかしら。」

もちろん、こんなの嘘。

お散歩するふりしてお庭にでて、そのままお城の外に逃げるって
いう作戦よ。

「いってらっしゃいませ。くれぐれも城の外には出ないで下さいよ。

」

「わかってるわ。」

リールはにこやかに手を振っている。

ふん、メイドを騙すくらい簡単よ。

わたしはお庭に出ると城の裏に回りこんだ。

「いでよ、ほづき。」

ぼわん。

白い煙と共にほづきが現れる。

「飛ぶのよ。」

あたしはほづきにまたがった。

地面がどんどん遠ざかっていく。

「ばいばーい。」

お城に向かって手を振る。ほとんどが白くて、ところどころで金が輝いている。でもいくら立派なおうちだってつまらないものはつまらないわ。

どこに行こうかな。

どうせならうんと遠くに行つてやるんだから。

「パステック街まで行つてちょうだい。」

ほづきはものすごいスピードで南に向かって飛ぶ。

パステック街の人気の無い路地に下りる。

このドレスはなんとかしないと。プリンセスってばれちゃうもん。

「服の妖精さん、力を貸して。」

指を組んで目をつむる。

魔力の発生を感じて、目を開く。

あたしの服装は完璧に普通の住民。

こついうところでお買物してみたかったのよ。

果物屋さん、八百屋さん、魚屋さん……。

初めて見るものばかりだった。

「ねえ、君名前は？」

あたしと同じくらいの子供達。

何の用かしら？

「ミル……じゃなくて、ルルよ。」

危なかったわ。正体がばれたら大変なもの。

「ルル、僕らとサッカーしない？どうしても1人足りないんだ。」

サッカー？みんなでボールを蹴る遊びだったかしら。

まあ、ヒマだし遊んでやってもいいわ。

「いいわよ。」

「ほんと！ありがとう、ルルちゃん。」

そういえば、同年代の子と遊ぶなんて初めてだわ。

さっきの男の子が公園まで案内してくれた。

「ルル、シュートだ。思いっきり蹴ってやれ！」
「ええ。」

あのゴールとやらにボールを蹴ればいいのね。
よしっ。

思いっきりボールを蹴る。

入ったわ！これで……いいのかしら。

「やったー！すごいよルル。僕たちの勝ちだ、ルルのおかげだよ。」

「ありがとう。」

「すげーな、ルル。」

みんなが口々に言う。

こんなに楽しいの、うまれてはじめてだわ。

ママやリールは「はしたない。」って言うけど、みんなで遊ぶのもいいものね。

「もう1試合しようぜっ。」

こんな感じで、あっという間に夕方になってしまった。

「ミル！」

名前を呼ばれてとっさに声が出した方向を向く。
ん？なんであたしの名前を知っているの？

あたしの視界に入ってきたのは……

ブルーのドレスに、金色の髪。

「ママッ！」

「女王様」

みんなとあたしの声が重なる。

「どうしてこんな所にいるのです！」

「だって……」

「ルルって、ミル様だったのか！」

男の子があたしの声をさえぎった。

あたしは曖昧にうなずく。

「あの、だましてごめんなさい。」

みんなに頭を下げる。

「いえいえ。私たちこそ無礼なことを……。」

「おれ達、何も知らなくて。」

「申し訳ありません。」

私の正体を知ったみんなは、さっきまでのみんなじゃなかった。もう、みんなとは遊べないのかな。

「みなさん、うちのミルがご迷惑をおかけしました。」
ママが謝る。

「さあ、ミル。帰りますよ。」

わたしはほうきを出してまたがると、みんなに手を振った。

「ばいばい。」

「さようなら。」
みんなは深々と頭を下げる。

わたしは「ばいばい」って手を振ってもらいたかった。
敬ってほしいなんて思っていない。
なのに……。
王族なんていやだ。

お家がせまくても、メイドがいなくてもいいから、普通の住民に
なりたい。
友達がほしい。

わたしのほうきはお城へ向かう。
運命ってやつかな。
なんて残酷なのだろう。

ママはみんなと話したいっていつから置いてきちゃった。

お城ではリールが出迎えてくれた。
ここがあたしにの与えられた唯一の世界なんだ。
ここから出ることは許されない。

誰かの声で目が覚めた。

「ルル、サッカーしようぜ。」

ずっと聞きたかった声。
幻聴かな。

あたし、頭までおかしくなっちゃったの？

「ルルちゃん。」

現実なのかしら？
ゆっくりと窓を開ける。

そこは、いつもとは違う世界だった。

『みんながいる。』

「女王になるために必要なもの。それは教養と友達よ。
後ろでママの聲がした。」

「ママ……。」

「さあ、みんなが待っていますよ。
あたしはうなずいて外へ出た。」

「ミル様はお姫様だけど、ルルは僕らの友達だから。」

わたしの世界は2つある。

1つはプリンセス・ミルとしての世界。

そしてもう1つは1人の住人・ルルとしての世界。

わたしの1番好きな言葉は
『ルル、サッカーしようぜっ』と『友達』。

空には大きな虹がかかっている。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6797/>

2つの世界

2010年10月21日23時34分発行